
もう後戻りさえ出来ないまま。

流星 ノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう後戻りさえ出来ないまま。

【Nコード】

N4520R

【作者名】

流星 ノル

【あらすじ】

「ことばのかたち」の後編みたいな話です
団固は帰ろうとした楓を呼び止める
心にずっと思っていた事「一緒に住もう」と言う
楓は頷き、喜んでいたのもつかのま。
その時に団固の上司がやってきた・・・

時間は流れて。

「あ、楓」

私は帰ろうとする楓を引き止める。

彼女は1人暮らし。

私のせいで。

「なに？姉さん」

何食わぬ顔で振り返る。

その顔が私にとってすごく胸が痛む。

「少し、話がしたい。」

時間、空いてるか？」

「別にいいよ」

返事はすぐに返ってきた。

お互い1人は嫌らしい。

私は思い切って思っていたことを口に出す

「ごめんな。」

約束、果たせなくて」

私の一言にしばらく楓は黙っていたが。

「もういいよ。」

どうせ姉さんは姉さんだから

ほかの誰でもないでしょ？」

はにかむ。

私は返す言葉が無く

黙る。

ふと、こんな無茶振りをする。

「楓！

いつその事、一緒に此处で暮らさないか？

お互い1人暮らしだし・・・

・・・なんでもない、忘れてくれ」

途中から何を言いたいのか解らなくなり中断する。
だが・・・

「うん。」

私も、姉さんと、暮らしたいな」

「え？」

楓の顔を見る

苦笑いでこちらを同じように見ている。

「1人寂しいよ。」

姉さんが死んでから

私は母さん達とも仲悪くなっちゃって」

「ホントに、ごめん」

「ううん。」

姉さんも、意思的に自殺したんじゃないんでしょ？」

確かにそう。

私が死んで自殺したはずの生き物になる死神になったのには理由があった。

私は自ら崖から落ちた。

確かにそれなら自殺になりうる。

それが他殺だとして犯人が人喰鬼神だったから

私ははれて死神の仲間入り。

楓はその弱った心に引かれた妖怪に取り付かれるわ

災難続きだった。

妖怪は今、楓の体内に眠っている。

彼女に何かあつたら出ると

そう言っていたのだ

「あら？知ってる顔ね

何してるの？団固」

ゾクリとした。

後ろからだ。

この感じは知ってる。

足が動かない。

でも、楓が居る

守らないと。

ゆっくりと振り返る

そして楓を守るように右手を広げて言った。

「これはこれは、お久しぶりです

何か御用ですか？リンカ様」

短い茶色の髪。

こげ茶のリボン、紫のフリフリのドレス。

物騒な見たことの無い刃物をもって、彼女は立っていた。

死神界第三強上司の1人。

リンカ・リリアム

死前は悪魔の極悪非道の上司だ。

しばらく私とリンカの間には火花が散る。

彼女とは人間になる時にも同じようにされた。

彼女に睨まれると動けなくなるのだ

これも悪魔だからなのだろうか、それとも・・・

「はぁ・・・」

やってきた元上司に飲み物も出さないなんて・・・

貴方なってないわよ？団固？」

少しだけ心の中で舌打ち。

こいつ、長居する気だ。

そう思いながら私はさっさと珈琲を入れに台所に向かった

死神界第三強上司。

姉さんが行ってしまう。

どうしようどうしよう

こんな怖いお姉さんと長時間喋らずに居たら私駄目になるって・・・

ああああ・・・

姉さん行っちゃったよお・・・

「ねえ。」

「は、はひっ！」

呼ばれたよ？！

変な声出ちゃったよ？！

あ・・・頭がグルングルンするう・・・

「ふふっ」

リンカ・・・さん・・・笑った？

そつと顔を見る

「あはははっ！！

貴女意外と姉にも似つかず可愛いじゃないのっ！！！」

「え・・・？」

へ？え？」

訳がわからず目が回る。

だつてだつてこの人いつの間にか私の目の前にいて・・・

手、行き成り握られて！？

「あら？魔界式の挨拶よ？

手にキスくらい」

いやそれ何処の外国？！

魔界？魔界っていった？今！

魔界っていったらえーつとえーつと・・・

「ちよっ！リンカ！！

何やってんだっ！バカっ！！！！！」

こんがらがる頭を片手で抱えた私を
誰かがリンカさんから放す。

赤い綺麗なウェーブのかかった長い髪。
でも、片手の大鎌が私を正気にもどした
死神だ。

あれ？でも雰囲気は姉さんに・・・似てる。

その人はリンカさんを立たせると私に振り返って言った

「団固の妹・・・か」

「え・・・えと、従姉妹・・・です。」

私の即答に、その人はしばらく考え込んでいたが

「あ、そっか。」

そうだったな。

悪い悪い、間違えた」

そして、三人目、もう1人黙っていた女の人。

金色の腰までのびたストレートの髪の女の人。

顔立ちも綺麗でかなり可愛い人だ

そつ、まるで・・・天使。

「ねえ、地子^{ちこ}、この子なんで私達見えてるの？」

ふと一言またふわつとした声で

女の人は赤髪の女の人・・・地子さんに聞く。

「・・・あ、確かに。」

普通の人間は死神見れねえもんな」

じーっと顔を見られる。

な、なんか恥ずかしい。

ガシャン。

凄い音。

台所から珈琲を持ってきてた姉さんがグラスをおとした。

お盆が割れた。

カタカタと地子さんに指を指す姉さん。

「せ・・・先輩何やってるんですかっ?!」

人の妹に！！！！！！」

姉さんはズンズンとこちらに歩いてきて
私と地子さんを引き離す。

「何だよ、顔見てただけじゃないか・・・

それに私はタメ口でOKって言ってるだろう？」

あ、解った。

雰囲気じゃなくて、性格が似てるんだ。

「団固ちゃん、私も珈琲欲しいな？」

あ、ミルクはたっぷり入れてね」

天使みたいな人が姉さんを見て手を振る。

「・・・はい、ただいま」

死神って、上下関係厳しいのかな・・・

姉さんが行ってから

「さて、団固ちゃんの従姉妹ちゃん。」

「あ、はい」

呼ばれて返事をする。

優しい顔で聞かれる

「貴女、名前は？」

見渡すと他二人も聞きたそうにしていた

私が答えに困っていると地子さんが

「・・・じゃあ私達から自己紹介するか。

名前が解らないと呼び方が解らないからな。

私は地子、かわながれ河流 地子だ

死ぬ前は河童だった」

続いてリンカさん

「私はリンカ、リンカ・リリアムよ

死ぬ前は悪魔だったわ」

そして・・・

「私はカナリア・ナアガラシャ。

皆には奏かなでって呼んでもらってるの

死ぬ前は天使だったんだけどね」

本当に天使だったんだ・・・

そして、私はもう一つ、気になった。

「天子あまね・・・ちゃん」

その一言に、やっぱり地子さんは反応した

「お前、天子を知って・・・？」

「知ってるもなにも、同じクラスです

話は聞いています。

あなたは・・・地子さんは天子ちゃんの・・・」
お姉さん。

確か、妖怪姫の座につけたのはいいけど

姫の座は姉に行くから・・・

天子ちゃんのお姉さんは自殺したって聞いた。

ふと、地子さんは

「天子は、元気かな？」

「・・・はい

水泳部で今かなり活躍してますよ

やっぱり河童のお姫様ってすごいですね」

また辺りが静まる。

「・・・妖怪までも知ってるなんて・・・

能力者のような感じもしいし・・・

ねえ、貴女、本当に何なの？」

リンカさんが問い詰める。

私はこの話の方針が解ってきた

「あの、私、楓って言います。

十六夜、楓。

多分私が皆さんのことを見ることが出来るのは

私が妖怪に取り付かれているからだと思います」

「・・・なんの妖怪？」

種類によれば魂を少しずつ食べる奴だって・・・」

私は、はつきりと、言った

「白蛇はくじやです。」

「「「は・・・白蛇?!」「」」

三人が声を合わせて驚く

それもそうだ、白蛇といえば

「白蛇っていやぁ・・・」

神に仕える妖怪だぞ・・・

逆に運良すぎだろう、楓」

地子さんの言葉に奏さんが深く何度も頷く

「え？」

白蛇ってお酒につけて

宴会で飲むものじゃ無かったかしら？」

「それは魔界だけだと思うよぉ・・・」

リンカさんの言葉に奏さんは顔を青く染めて突っ込む。

「・・・何の話で盛り上がってるんですか・・・」

姉さんが帰ってくる。

珈琲はちゃんと人数分ある。

「あ。」

リンカさんが何かを思い出したように手を叩く

「本題を忘れてたわ

珈琲のんでからだけど」

そういつてリンカさんは少し不気味な笑みをして

珈琲を飲んだ。

裁判開始。

「じゃあそろそろ帰ろうかな。」

地子さんが立ち上がる。

「地子が帰るなら私も」

奏さんも立ち上がる。

「・・・」

リンカさんは黙ったまま珈琲を飲んでいた。

地子は一瞬眉を顰めたが

少し黙ってから

「先に帰ってるからな」

そういつて家を出て行った。

十分くらいの時が流れたかな。

リンカさんがふっと立ち上がった。

それと同時に、部屋の中の気配が変わった。

「ちっ・・・」

姉さんが舌打ちする。

「・・・あれ？」

動けない。

さっきまでは動けていたのに・・・

「さて、本題に入りましょうか。」

その声と共に

リンカさんの目が赤く光り

持っていた刃物が光った。

「さあ、ジャッジスタート裁判開始よ」

言葉にエコーが入る。

頭がくらくらする。

リンカさんの周りに二つの影。

「呼びましたか、リンカ様」

片方から男の子の声。

「ええ、裏切りものとその妹の排除よ

八尋は妹を、やひろ 痲尋はまひろ 団固を仕留めなさい」

「了解致しましたわ、ご主人様マイマスター」

八尋と呼ばれた女の子が、私の方へ歩いてくる。

勘、なのかな。

解る。

私は殺される。

「・・・ごめんなさい。」

「・・・え？」

前を見ると悲しそうな顔をした八尋がいた。

彼女は私に微笑むと

リンカさんの方を見ていった。

「ご主人様マスター、私にはこの人間を仕留める事は出来ませんわ」

「・・・どうしてかしら、ならば痲尋、あなたが・・・」

「残念でしたね、僕も姉さんに同意権です。」

僕は二人共殺すつもりはありません

そして、今日限り、僕達は貴女様の下で働きません」

痲尋は冷たい表情で言った。

いや、最初から表情は冷たかった。

その言葉にリンカさんは八尋を見る

八尋は一瞬ビクリと身体を振るわせたが

「姉さん。」

痲尋の声に急いで深呼吸して

「は、はい、申し訳、ないのですが・・・」

痲、弟と、話した結果・・・でございます・・・わ」

まだ声は震えていたが

目からして本気なんだろうな・・・

ふっと八尋は消える。

麻尋はふつと笑んで

リンカさんに一礼

「では、ごきげんようにございます

我等が生みの母である悪魔。

最高にして最悪で最恐の、リンカ・リリアム殿

貴女は所詮、ランカ様に勝れない負け犬なんです」

一礼したまま彼は

スウッと消えていった。

私はリンカさんを見る。

なにやらブツブツと言っていた。

「・・・ランカ、ねえ。

あの子とは縁を切ったはずなのに

いつまで付きまとうのかしら・・・

まあいいわ、従者がいなくなっても

結局は私が殺せばいいんだから」

刃物が二つになり

それが私達も目の前に来たかと思ったらそれは

銃になっていた。

姉さんをふと見る。

じつとリンカさんの事を見ていた。

そしてチラリと窓を見る。

「姉・・・さん？」

私の言葉に姉さんはこつちを見る

「ん？」

不安なんて無いような顔。

姉さんのその反応に

私は逆に怖くなってしまった。

「何で・・・なんでそんな平気な顔・・・」

銃は止まっている。

会話が止むのを待っているかのように。

「・・・もう解るだろうよ」

姉さんが目を閉じる。

カチャリと音がした。

私はとつさに目を閉じる

バンッ

「っ・・・」

あ、あれ？」

音はしたのに痛みは無い。

目を開ける。

私と姉さんの前に

先ほど帰ったはずの奏さんと地子さんが
銃弾を塞いでくれていた。

私より驚いていたのはリンカさんだった。

「どうして・・・」

何で止めるのよ！」

私達は身体が軽くなった。

身体が動くようになった。

「簡単な事さ」

地子さんがよろけた私を支えながら言った

「お前が黙り込む時は何か考えてる時だからな

団固の家だったから、目的はすぐにわかったよ

それと、止めたのには理由がある」

「私もね。」

奏さんもリンカさんを見る

まずは地子さんが話を始めた。

「私には妹がいるのはもう知っているだろう。

私は少なくとも団固と考えてることは一緒だ

私は妹という存在を助きたいんだよ」

「私には姉妹が沢山いました。

でも、その中で一人、姉という存在が大好きでした。

彼女は私をかばって死んでしまいました。
少なくとも、妹の為に死ぬ姉を
私は見たくありません！」

その二人の言葉に

リンカさんはガクリと膝を突いた。
シユンと誰かが入ってくる。

綺麗な銀髪。

オレンジ色のワンピース。
紫の瞳。

「リンカ・リリアム

錠破りとして、しばらく自分の部屋でジッとしているのね」

リンカさんが頷かないうちに
リンカさんの身体は消えていった。

「さて・・・貴女達

とくに団固ね。

最近どう？」

「いや、元気そのものだね。

風邪一つひかない」

姉さんは即答。

早く帰れって言ってるみたいに

「そしてカナリア・ナアガラシャ」

声をかけられ、

少し戸惑う様子の奏さん。

「要^{かなめ}・・・いえ。

カナミリア・ナアガラシャが会いたがってたわ
今度神界にいらっしやい

歓迎するから」

神・・・界？

ということはこの人は・・・

「そして・・・白蛇

もとい、十六夜 楓」

呼ばれて少しビクツとなる

「は、はい」

「ふーん、やっぱり姉妹って似るものなのねえ……」

じーっと見られる

「はえ……え……と」

赤面になるのをこらえる。

「ま、それは後でいいわね。

始めまして、

私は菊月 きくづき 朱音 あかね

11月と掟の神よ、よろしくね。

人間だった時の名前のがよく知られているわね。

坂浅井 さかあさい 磨土花 まどか

聞いた事あるでしょう？」

私は、その名前を聞いた瞬間血の気が引いた。

姉さんも同じ顔をしていた

きつと初耳だったんだろう

「うそ……。」

坂浅井 磨土花が神になった？

そんな事あるわけない。

そんなの私達が許さない。

許せるはずがない。

坂浅井 磨土花、その人物は

10年前、大変な罪を犯して死刑になった極悪人。

私の友達、そらかぜ空風 すすか鈴香

の家族を全員殺した張本人……。

神の存在理由。

「じゃあ・・・貴女が・・・

貴女が、鈴香ちゃんを一人にしたっていうんですか!?

鈴香ちゃんはそのせいで・・・高校に行けてないんですよ!?!」

「じゃあ鈴香まで殺せば、良かったのかしら」

最後まで顔色一つ変えず。

本当に冷たい声で言われる。

「それは・・・でも、どうして・・・」

「・・・私はね、貴女がうらやましかったわ

死んだはずの姉が今隣で笑ってくれているという現実がね

私には、妹がいたのよ。

鈴香の父は教師だったわね、体育の。

それも暴力を振るう最悪なね

妹は運動神経無しかったから集中的に暴力を振るわれていたわ

あの子は隠してたつもりだったんだろうけど

アザが見え見えだったわ。

私は、そこまでするあいつが許せなかった。

だから殺したわ

家族諸共ね。

・・・でも殺せなかった

鈴香だけは、妹と似てたから殺せなかった。」

「だからって人殺しは・・・」

「ええ、そうね。

罪は罰に変わって私が死んだあと

妹に移ったわ。

なにも、あの子まで殺さなくていいのに」

殺人犯の犯行理由。

それは二ユースでも取上げられなかったほどの

小さな事だと、政府は言った。

今、真実を聞かされ私は啞然としていた。

ああ、世間は冷たい。

どうしてこんな理由を流さなかったのか。

そうしていれば彼女は、その妹は・・・

「でもね、誰かさんの御陰で私は今妹と一緒に神として楽しくや
てるわ」

菊月さんが姉さんを見る。

「貴女が炬乃花^{このか}の魂を冥界の番人に渡していてくれたから

私もかなり話がとんとん拍子に進んで炬乃花を規則の神に推薦で
きたの

本当に貴女には感謝してるわ、団固」

「ふ、あの時に私を金縛りにしたのは誰だったか」

仲が良いような会話が續いていた時。

「菊月・・・あなたねえ・・・」

「あら水面^{みなも}、早かったわね

大罪、ちゃんと元に戻したの？」

紫の髪、紫の目、真っ赤なドレスに似合わない麦藁帽子。

「あ、あの時の。」

姉さんも反応した

「あら、団固じゃない

生きてたのね」

「一回死んだ。

誰かさんの手紙のせいだな」

クスクスと彼女は笑う。

「大罪なんてもうどうでもいいのよぉー！

今は菊月と一緒にいたいのに」

そういつて水面さんは菊月さんに抱きつく。

菊月さんはウザそう・・・。

「・・・あなたは・・・

自分に置かれている立場がわからないのね・・・」

「菊月の彼女でしょ？」

「違うわよっ！」

まったく、監視するものされるものの関係でしょ、バカ」

「監視こそが愛の形なのよねっ」

「・・・っ

はぁ・・・

長居したわね、帰るわ」

その頃、魔界。

「今日から貴女様・・・いえ

ランカ様の僕にてございます。

麻尋にてございます」

「お、おなじく姉の・・・

八尋で・・・きやう！」

八尋に大きな壺が投げられる。

「なっがい説明はいいですわ

さあさ、早く掃除をするか

果物類を魔王様にお届けなさい！」

「はい、ランカ様」

「は、はい、ご主人様マイマスター・・・」

二人はテキパキと言われた事をやりに行った。

「ふうん・・・」

それを新しき主人ランカは見下すように見ていた。

そして空を睨んだ。

でも、口は笑って

「姉さまにはこんな出来すぎた僕がいたのですわね・・・

・・・ふふっ

もったいないもったいない

私に虐められて自殺した

弱い弱い姉さまには勿体の無い下僕ですわゝ・・・」

神の存在理由。（後書き）

・・・珍しく妹さんがドSです。

殆どが姉なのにな。

でも私的には

さとり妖怪姫、さとりさんの能力を閉ざした姉のことりさんのドS
っぷりが好きだんだけれど。

しかしこんなによくSを作っておいて

Mが居ないってのもどうかなあ・・・って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4520r/>

もう後戻りさえ出来ないまま。

2011年10月8日20時27分発行